

膠原病類似の病態を含め多彩な症状を呈した、ヒトパルボウイルス B19 感染症の 11 例

¹広島赤十字・原爆病院 リウマチ科

○小熊 麻子¹

【はじめに】ヒトパルボウイルス B19 感染症は、感染経路は主に飛沫感染であり、ほぼ 5 年毎に春～初夏に流行することが知られている。成人における感染症状は、小児と異なり典型的皮疹を伴わないことも多く、自己免疫性疾患類似の所見を呈し、多彩な症状にて診断が困難なことも少なくない。今回我々は、広島県及び全国で小児伝染性紅斑が流行していた 2011 年 3 月から 2012 年 5 月までの約 1 年間に、膠原病との鑑別が必要であり当科を受診した、ヒトパルボウイルス B19 感染症の 11 例を経験したため報告する。【症例】症例は 28 歳～54 歳で男性 1 例、女性 10 例、平均年齢 36.3 歳であった。発症時期は 2011 年 3 月に 1 例、6～7 月に 3 例、10～11 月に 3 例、2012 年 4～5 月に 4 例と、初春～夏、秋の伝染性紅斑の流行時期と一致していた。家族内発症は 4 例であった。全例に倦怠感、筋肉痛・関節痛・手のこわばり感のいずれかの症状を認めた。皮疹は 8 例に認めたが、その出現時期は発症と同時期の場合と、他症状が落ち着いた後に新たに出現した場合と症例によって差があった。顔面や手足末梢の浮腫を 7 例に認めた。38 度以上の高熱は 7 例で認め、37 度台の微熱で推移したものは 2 例であった。10 例中 7 例で補体の低下を認め、1 例で抗 DNA 抗体、2 例で抗 CCP 抗体の自己抗体が検出された。いずれも対症療法のみで症状は軽快し検査所見も改善した。一時的に SLE の診断基準を満たした症例も 1 例あった。【結語】SLE をはじめとする、膠原病類似の症状を呈したヒトパルボウイルス B19 感染症の 11 例を経験した。発症時期は小児伝染性紅斑の流行を認めていた時期でもあり、周囲の流行状況も考慮し成人においても念頭に置くべき疾患の一つと考えられた。一時的に膠原病の診断基準を満たすこともあり、リウマチ、膠原病を疑う際に除外すべき疾患と考えられた。我々の経験に若干の文献的考察を加え報告する。

ステロイド長期投与によりサイトメガロウイルス (CMV) 性肛門潰瘍を認めた AIDS の一例

¹川崎市立 川崎病院 内科

○中島 由紀子¹、坂本 光男¹、西 和男¹、田口 博章¹、野崎 博之¹、秋月 哲史¹

症例：30 才男性。現病歴：間質性肺炎の診断にて約 3 か月前からプレドニゾロン (PSL) 投与を開始されていた。しかし改善認めず、前医に紹介となりニューモシスティス肺炎 (PCP) と判明。抗 HIV 抗体陽性であり、AIDS の診断に至った。ST 合剤 12 錠内服と PSL の継続にて PCP は改善した。前医入院中から肛門周囲の疼痛を認めていたが、経過観察となっていた。その後外来通院中に症状が増悪、発熱も伴うようになったため前医受診。重度の肛門潰瘍を認め、精査目的に当院転院となった。入院後経過：鼠径のリンパ節は触知せず、血液データでは炎症所見を認めなかった。肛門狭窄と肛門周囲の深い潰瘍とを認め、皮膚科にて洗浄、デブリードマンを施行した。また排便を回避するため経口摂取を中断とし中心静脈栄養を開始した。疼痛のため体動も困難であり、モルヒネの持続静脈注射を使用した。糞便・創部培養では有意菌は検出されずアメーバ抗体も陰性であり、下部消化管内視鏡は肛門狭窄による疼痛が強く、実施不可能だった。TAZ/PIPC およびメトロニドゾールを投与したが改善しなかった。皮膚生検にて CMV 封入体を認め、CMV アンチゲネミアも陽性であったことから、GCV 600mg で治療を開始した。その後、肛門潰瘍は徐々に縮小し疼痛も軽快した。約 1 月半後、疼痛が制御可能となり排便、歩行も可能となったので退院とした。HIV 感染症に対しては入院中から TDF/FTC+RAL にて治療を開始した。考察：HIV 感染者における CVM 感染症は多彩な臨床像を呈する。本症例では、原疾患による免疫機能低下に加え、ステロイドを長期に投与されたことが CMV 再活性化の原因と考えられた。診断には難渋したが、肛門部の皮膚生検によって診断に至った。このように HIV 感染者の合併症においては病理学的診断が重要であることを再認識した教訓的な症例と考え報告した。